神経症的児童を形成する乳幼時期環境の分析と考察*

宮城県中央児童相談所

佐藤 棟 男**

I

問 題

臨床心理学の対象となる不適応児の中で、神経症的児童は極めて大きい割合(註1)を占めている。だが不適応児の分類については、学派は勿論のこと論者によっても異なっている場合が多いばかりでなく、神経症的と云う診断用語の概念内容は寧ろ未だ不明確な段階(註2)にあるとさえ云い得よう。それで初めに、神経症的児童とそれを形成する環境の輪廓について筆者の考えを述べ、問題の所在を適確に呈示したい。

神経症的児童に於ける混乱の中心を為すものは神経症的な諸慾求(註3)であると考え、次の様なものを例として挙げる事ができる。愛情と賛意を求める慾求、人生を案内してくれる仲間を求める慾求、手段を選ばず優越しようとする慾求、名声をあげ社会から承認されようとする慾求、自己充足感と独立を求める慾求、完全さと無欠点を求める慾求などである。この様な分類には自ずから限界もあり、更に加えられるべきものもあるが、相互に葛藤・従属・融合の力動的過程を通し、密接に関連しながら行動を底深く規定しているのである。これら神経症的慾求の著しい特徴は強迫性をおびている点にある。そのため第一に目的が無弁別に追求されるので、現実と自己の眞の興味とは全く無関係に求められる傾向を持つ。第二にそれら諸慾求の慾求阻止から容易に不安反応が惹き起され、此れにより神経症的慾求が安全弁としての価値を有している事が示される。以上の様な傾向をおびてはいるが、その本質的な要素は無意識にあるのである。要するに行動が神経症的慾求によつて規定されている結果、不安が増大し妥当な解決を見出す事ができないし、且つ神経症以前の状態にある者を神経症的(註4)と診断する。この様な児童の生育歴からは不安に条件づけられた

多くの徴候と習性を見出すことができる。

以下は問題の所在を明確にする観点から、神経症的児童を形成する環境の輪廓について論及する。発達過程の出発に際し、神経症的児童を形成する基礎要因(註5)をなすものは、一方に於いて有機体としての基本的な生物学的慾求、或は本能と体質的特性であり、他方個人が生をうけた環境の装置である。同時に児童は体格や身体機能等に示される様な成長する個人の潜在力による変化をも蒙り続けるのである。それらの要因を基にして発達過程は経過するのであるが、個人と環境は行動の法則(註6)即ち $B=f(P \cdot E)$ に厳密に表現される様な力動的関係を保ちながら進展するのである。だから児童が絶えず成長変化すれば、環境もその範囲と分節度が発展し同一環境条件も全く異なつて受けとられると云う心理的事実が存在するのである。

かくして発達過程に於いて児童と力動的関係をもつた凡ゆる環境が考慮の対象となるのであるが、特に其の主要素を構成し、パーソナリティ形成の媒介又は直接の条件と考えられる人間関係(註7)が問題となる。そして児童の生後数年間は、生理的慾求の為に両親特に母親に殆んど完全に依存しているので、其の間の密接な相互関係を中核とし、家庭に生活環境を有する乳幼時期の児童にとつては家族構成者との人間関係(註8)が主なのである。従つて家庭に於ける人間関係の障害が神経症的児童を形成する病因の源泉をなすものと考えられ、次第に近隣社会や幼稚園に於ける関係も加えられてくるのである。そしてどんな神経症的慾求が生ずるかは、児童が経験してきた人間関係の性質による所が大きいのである。

神経症的慾求を形成する本質的なものについてふれてみよう。児童は孤立・頼り無き・恐れ・敵意などの感情におそわれ、自己の弱さと無力を痛感し、基本的不安に駆られる。こうして余儀なく安全に人生に処して行く方途を探すのであるが、選ばれる途は与えられる条件の下で受入れられ易い方法である。それに嚴重に従う他に、危険を避け安全を保つ途はないと感ずるため、強迫性をおびた所謂神経症的慾求が導き出させるのである。またこの様な基本的不安によつて条件づけられている神経症

* Analysis of the Environments which Make up Neurotic Children in Childhood.

** By Muneo Sato (Central Child Clinic, Miyagi Prefecture)

的慾求による安定感の保障は何時も危なげであり、その操作がつまづかされると直ちに現実の危険に即さない所謂神経症的不安が発生し、悪循環的に諸慾求の強迫性が助長されるのである。それで或る種の神経症的慾求をあみ出させ助長させる不安を惹き起した直接間接の環境的悪条件(註9)を、全体としての機能を見失う事なく把握しようとするのが本研究の目的なのである。

児童に不安を惹き起し神経症的児童を形成する環境要因(註10)として、具体的に両親の不安定さや性的不満を挙げるのはパーソナリティそれ自体に原因を求めているのであり、窒息しそうな愛と威嚇・虐待と讃美の組合せや負担となる様な強制を考えるのは児童との直接の人間関係に原因を求めていると言える。それで本論に於いては、直接の人間関係と共に其れと不可分離な関係にある背後要因と云う様な環境の構成層に充分留意して、神経症的児童又はパーソナリティの形成上決定的影響を及ぼす乳幼時期の生育環境をケース分析し(註11)、其の結果を基に更にホルネイの親子関係について述べる所と比較対照しながら考察を試み様とするのである。

註1) 例えば Dorcus (5, p 313) Hamilton (8, p 21) Kubie (23, p 11) 宇津木 (26, p 8) が述べている。特に Hamilton は、ユダヤ人保護協会に於ける 1944年7月から1年間の取扱いケースの統計的分析により、42%が psychoneurotic であり、更に primary behavior disorder と診断された40%の約半数が神経症的習性を含んでいたと記している。

2) この事は Basel (2, p 192) の次の言葉から強い支持を与えられる。「研究者は人間の様々な拮抗した精神的傾向の Konfliktproblematik, 就中健康者と患者の意識の研究が、数十年来承認されていると云う意義を理解した時に、初めて神経症の如何なるものかを理解するであろう……」。又 Dollard と Miller (4, p 12) は「神経症的被害者も或は彼を知る人々も包含されるものを適確に述べる事はできそうもない」と云う。

3) Challman (3) Fenton (7) Prescott (18) Thorpe (21) の云う基本的慾求も、強迫性をおびれば Horney の云う神経症的慾求と同一機能を果すものと考えられる。それで神経症的慾求の分類及び表現形式については、其等論者の考え方を参考に行っている。しかし本節の多くは新フロイド派の Horney の4文獻(9~12)、就中 Self analysis (10) に示された考え方になっている。

4) 正統フロイド派の Kubie (23, p 18) は「表立った神経症症状が全くない場合でも、その生活が無意識の葛藤と無意識の目的との妥協から成っている限りにおいて、人は『神経症的』であるといえる」と述べている。更に Hamilton (8, p 72) は「神経症的葛藤をもつ児童とは、自我が拒否する幼見的な願望と衝動に幾分か固着されて、life energies が妨げられ歪められた児童である」と云う。

5) 神経症的児童を形成する基礎要因については Malamud (17, p 840~847) の論述を参考としたのであるが、他に例えば知能や性別などを度外視する理ではない。

6) Lewin (15, p 70~79) に依れば行動(B)は事態の函数であり、全事態は人(P)とその周りの環境(E)とに大別してみられるので、 $B=f(P \cdot E)$ と表現される。かくて行動は人と環境との成す結構から導来されるものとされる。

7) 神経症的児童の形成要因を考察する時、Kanner (13, p 769) の云う多元的な考慮を怠ることはできない。だがここでは環境の分析を目的としているので自然人間関係に焦点が合ってくる。パーソナリティ形成の媒介や不適応を導く病因として人間関係もしくは親子関係に重要性を附与していると考えられる者に、Fenton (7, p 107) Horney (9, p 9) Louttit (16, p 33) Eliot (22, II) などが挙げられよう。この様な考方に従う人ばかりでない事は勿論で、Freud の考えを若干修正した程度に止まる人人も数多い。例えば Slavson (20, p 69) は「吾々が現在当然なる考慮を払っているところの、児童に於ける多くの緊張や不適応の性的性質の意義や Oedipal conflict の重要性を過少評価することなく、パーソナリティの形成とその混乱にかかわる他の要因—主に人間関係(筆者)—も同様に留意されなければならない」と。

8) Lausanne (14, p 54) は家族或は社会環境の役割が全ての研究者の意見に徴して絶対であり、Sozial schwierige Kinder und Jugentliche の場合には優勢であることを述べている。

9) Horney (9, p 276) は「それらは一多くの有害な環境の影響の組合せ(筆者)—精神分析治療と関係がないし、殆んど知られていないので、その一々の構成要因の影響については考えない」と記している。

尚本節は Horney (9~12) の所論を基に考察したのであるが、彼の云う不安の概念と異なる見解をとる者の多い事は7)と同様である。例えば Slavson (20) と極めて類似した立場に立つていると思われる Hamilton (8, p 31) は、「psychoneurotic deviation は、oedipal conflict の不完全な解決と幼児の不安から抗進する“性的”な面の混乱を示すのである」と述べているが、此の言葉の中に示された不安の概念内容はその例である。

10) Dunlap (6, p 145) の云う様に原因の不明瞭な徴候もあるので、本論では個々の徴候を形成する特殊な環境を考察しようとしているのではない。

11) 神経症的児童を形成した乳幼時期環境のケース分析については、心理学関係では、隠岐・江草 (24) 並びに筆者 (25) が報告している。

II

方 法

一言にして述べればケース分析であり、治療効果を期待する上に必然的に要求される児童の適確な社会及び臨床の両診断と病因を把握する過程に求められ、主として

次の諸方法から成っている。(1) 児童の生育史及び家族歴の聴取、(2) 家庭・学校・近隣社会から成る環境の調査、(3) 児童とその家族に対する直接観察、(4) 心理テストと精神医学的検査、(5) 児童相談もしくは心理治療。これ等の諸方法により、究極的には無吟味の儘の分析操作によつたのである。尙これ等の方法は心理学と精神医学の両判定員、並びにケースワーカーから成る児童相談のチームにより選ばれたのである。筆者は心理学判定員として、本論で取扱つた児童については、特に長期に亘り責任をもつて当つた。

III 対 象

宮城県中央児童相談所に於いて、昭和27年8月から同29年7月迄の2カ年間に、筆者が教育相談*として取扱つた神経症的児童の中、乳幼時期を問題とする観点から6・7歳児であり、且つ関係者により歴然とその不適応行動が問題視されている児童を選択した。その結果分析の対象となつた児童は(A)6歳、(B)6歳5カ月、(C)7歳4カ月、(D)7歳11カ月の四ケースであり、何れも中都市に居住する中流家庭の男子児童で、女子児童は1名も含まれて居ない。

IV 分 析

ケース(A)

診 断 幼稚園の先生にはどもらないで朝の挨拶をするのに、友達に話す時には気の毒な位どもし、何か衝撃があると一週間位ひどいのが続く。家庭では最近父親になつく様になつたが、ききわけのある子で母を手古摺らせることはない。声は低めで乱暴な遊びはせず、物をきちんと仕末しておく。幼稚園では本を二人で見ることを好まず、積木も一人離れて作り、自由時間も学習している様な緊張がみられる。

内向性であると共に非常にセンシティブな体質的特性を有し、知能は優秀である。母との人間関係は共感的で友人同志と言つた印象を受け、徴候は吃音だけである。ナルシステックで受動的な性格特徴を有し自己意識が過剰なので、自己表現や社会的行動を必要とする事態に於いて無意識的葛藤が生ずるのである。完全や讚美又は依存や承認への欲求が優勢な神経症的児童である。

環 境 一人子に対する周囲の大人の愛と讚美——母の兄と従兄弟が父と同じ職場である関係から、両親は結

婚した。父は10人兄弟の中で育つたので子供は多くいないと云い、計画産児をしている。4歳2カ月まで実家の屋敷内に居住していたので、祖父母にはとても可愛いがられ、優しい女の子と仲良く遊んでいた。また体格は細長型で優しい父に良くあまえている。要するに周囲の大人から愛情と讚美で一定の行動を期待された事が、著しく受動的な性格とさせたのである。

ナルシステックな母の共感的養育態度と重荷となつた嫉——母は末子として育ち、若干幼児的で神経質なところが目につけられる。母乳は豊富であり、1歳2・3カ月頃からは他の食物も与え、2歳半で離乳した。当時から病気をさせない事だけに夢中で気を配り、児童も憎らしい位追いかけて歩く風であつた。面接中も母から離れることを好まないし、友人同志と云う印象を受ける。この共感的人間関係を通して母のナルシステックなパーソナリティが強く影響し、更に周囲の大人から愛情と讚美で迎えられている。その反面母は一人子への期待と焦躁感からきつめに育てていた事が不安を生じ、完全や讚美への神経症的欲求を形成したのである。

高熱や消化不良に罹患中の充分な保護と左利きの矯正——2歳9カ月目に病名の判らない40度以上の高熱が一週間も続いたのですっかり衰弱したし、退院後も暫らく寝かせていたので、起きてからもふらふらして歩けないほどだつた。3カ月後には消化不良となり、一カ月程入院して奇跡的に助かつた。医者のすすめで再び哺乳を初め、可愛想なため四歳迄続けたので、離乳の時は二日ほど夜中に泣かれた。その後は風邪をひいたりしていたが、間もなく吃音が初まつた。尙1人で食事を初めた頃から左利きであり、入院中から気づいた時少しづつ注意し、4歳10カ月からは良く注意したので入園する頃は右手になつた。病気で保護され依存心やナルシステックな傾向が助長されていただけに、左利きの矯正は強い葛藤を惹き起し神経症的不安を生む結果となつている。

受動的で自己中心的な児童が社会生活から経験する圧迫——家庭では来客の時や友人と遊ぶ時に精神的負担を感じており、幼稚園でも遊びに参加しないで引込み思案で便所に行きたい時は躊躇していると云う工夫である。吃音そのものでも友人に笑われてひけ目を感じ、行動に自信がなく絶えず緊張している。自己発表や集団への参加を必要とする社会生活で神経症的不安を生じ、更にそれと対立関係に立つた完全や讚美又は依存や承認などの神経症的欲求が助長されている。

ケース(B)

診 断 入学後2・3カ月頃頃から、目立つて教室を

* 相談別分類の中、問題児相談と委託相談並びに知能テストを主とする教育相談は、本論の目的とする充分な環境分析を行うことは困難であり、又不必要なので対象としていない。

歩き廻つて級友をついたり、教壇の机に頬杖して先生の顔を凝視したりする様になつた。一寸した注意に抛ねるし、先生からは賞められる筈がないと云う。遊びには直ぐ入つて行けないし、動作がおそいので仲間はずれにされ、時々泣いて帰宅する。食事は家では気まぐれで吐く事もあり、絶対に肝油を飲まないが、学校では肝油を飲み給食もきれいに食べる。筆記は左の方が自然であり時に手淫を見かける。

内向性の顕著な児童で、人間関係は一般に寄生的であり、母とは極めて緊密で依存性の度が強くエロテックでさえある。圧迫されている感情・抑うつ的な気分*をもち、茫然として行動に自発性がない。深い自己評価を有し、耐忍度が低く社会的技術は未熟である。症状群と習性の形成には無意識の不安が作用しているのであり、愛情・依存・賞讃及び集団への所属など、様々な慾求のはげしい葛藤関係が内在している神経症的児童である。

環 境 不安定な母の神経質な養育態度——長い間結婚を承認されず実家や親戚と絶交状態にあつたばかりでなく、生活様式のみで異なる辺鄙な田舎で若くして新婚生活を始めたので、母は精神的打撃を蒙つていた。かつ社会性のない母は近所との交際にも負担を感じて避けていたので、自然不安定な母と児童との接触は必要以上に緊密なものであつた。この様にして依存性が強くつちかわれた児童との日常生活に於いて、母は神経質で安定性を欠き絶えず激勵と叱責を与える養育態度であつた事が不安を生じ、愛情・依存・賞讃及び集団への所属などの神経症的慾求の萌芽を形成し初めたのである。

未熟な母の思慮の足りない育児法——母は育児について準備も相談相手もなく当惑してしまい、児童が2歳半の頃父方の祖母から、離乳していない事や左利きを注意されたのである。その後やかましく、左利きの矯正につとめ箸だけは右にしたが、その過程で外傷的経験を生じ児童は持物を投げたり食事を拒否した事がある。そして次第に他の点でも一寸強制しようとする、肝癇を起す様になつたのである。また母は児童が皮膚病になつたのも汚い田舎の子供のせいと思つたし、其の後も粗暴な言葉を使わせまいとして、自由な行動の機会を与えないばかりか、外での遊びや交友を禁じがちだつた。更に児童が3歳半の時に生れた妹を母は終日まつわりつかせていたので、児童は嫉妬心を起す事が多いばかりでなく、妹の活潑な行動から不安を誘発されると云う風である。以上の様な思慮の足りない育児法も、烈しい不安を生じさ

* 諸種知能テストの結果からは平均知と診断されるが Rorschach test の吟味により抑うつ状態が知能因子へ負の作用を及しているの、一層高い知能を期待し得ると解釈される。

せ、神経症的慾求を助長し強化しているのである。

住居の変化と不自由さによる不安な生活環境 農家の一室や寺の本堂を間借したり、事務所に隣接し、職員の出入りの多い官舎に居住した事もある。その後4歳の時には勤務局内の六畳二間を借りて生活したが、隣りが事務室になつていて、母は夫やその同僚から泣かせない様に再三注意されるので、児童の我儘を通し随分悪くしてしまつたと云う。現在の官舎も二間で荷物が入っている為狭く、子供が家中で遊ぶので父はともうさがり絶えず机を移動させる。生後現在まで五度も転居し、且つ住居に恵まれていない事は、直接児童の安定感や社会性の発達を阻害しただけでなく、親の養育態度にも影響している。

子供好きでない父親からの拒否——几帳面でデリケートな父は、勤務局内に住んでいた時は勿論の事、その他でも忙しい上に子供好きでなく、読書や細い仕事のため家庭内での子供の遊びや泣声を制限し叱責しがちだつた。これも児童に不安を生じて一層母に接近させ、人間関係を極端に緊密にし寄生的にしたのであり、同時にエロテックな色彩をおびるに至らせている。

就学以後——既に幼稚園時代に落着きなさが問題とされていたのであるが、入学後2・3カ月を経て学校生活に慣れると共に抑制がとれ明瞭に不適応行動が現れたのである。

ケース (C)

診 断 入学式には母と勇んで出かけたが、翌日登校の途中でいじめられたと言ひ泣いて戻つてきてから、附添われなければ登校しなくなつた。だが初めは附添つてくれば登校したし、一足先きに帰宅されても落着いていたが、次第に側から離れられると追いかけて注意されると乱暴する様になつた。そして運動会では父兄席にいて参加しないばかりか、7月からは全く休んでしまつた。その為折檻した頃には寝言や夜泣きがあつたし、間もなく歯ぎしりや骸骨、爆発などの夢をみる事が多くなつた。

児童は内向性であり、又乳幼時期の生育史を通して非常にセンシティブな体質的特性を有する事が示される。一般に防衛的、逃避的で事態の変化に調和した社会関係を保ち得ず、家庭では無理に我を通す傾向も認められ、パーソナリティは統合していない。母に異常な感情固着を有する事が特徴で、そこでは親から次第に独立しつつある自我を認める事は困難である。依存や愛情への神経症的慾求によつて安定感が支えられ、不安及び罪責感の強い神経症的児童である。

環 境 家庭生活に不満な祖母・叔父・叔母による拒否——祖母は自分の子供にばかり気をとられ、多くの子供を育てたので孫はもう嫌だと言ひ、途角口先で禁止す

る事が多い。児童もいたずらや憎まれ口を利いたりするので両者は緊張関係にあつた。次女の叔母は子供嫌いであり、五男の叔父は夜勤や野球で疲れていてうるさいと怒鳴りつけ殴る事もある。このような家族の態度は、雨天のため皆が家に居る頃には殊にひどく児童に不安を生じさせ、安定感を与える母へと接近させたのである。尙四男の叔父の長期療養生活や思うにまかせない家計は、児童を取巻く家族に不適切な態度をとらせた原因ともなっている。

不安定な母の長子への盲愛——生後1年7ヶ月目に妹が生れてから、気嫌が悪くだだをこねて泣いてばかりいる日が多かつた。最初の子供なので大切に育てていたが妹の出生後一時食慾がなくなり、歩行が停滞した事もある。母は姑である祖母や児童の叔父・叔母について話す時には興奮し、祖母を当てにしないと言う。嫁としての母と祖母・叔父・叔母との対立関係や、家庭内のトラブルが母を不安定にした。これが祖母達に拒否され母の下に安定した場を得ている児童への盲愛となつたし、又何処に行くにも連れて歩いて可愛いがつた。強い愛着を有するだけに不安を生じ易く、依存や愛情への神経症的慾求が形成され、母子の感情固着を導いたのである。

住居の狭さが家庭緊張を高め児童の生活空間を極限した事——猫の額程の庭をへだてた垣根を越えて遊ぶと、大屋さんに叱られる。家屋は10畳の寝室と6畳程の父の仕事部屋、それに台所が主なもので、隣家とは襖で仕切っている。この狭い住居に多い時には9人もの家族が住んだので、児童に自由な生活空間を与えないばかりか、家庭緊張が高められた事と相俟つて、逃避する場をさえ失わせていたのである。この様に児童の生活空間が極度に限定されていた事は、絶えず不安を起させ、其れを解消せしめない素地条件を成していたのである。

嫁である母の厘々の家出——嫁である母の生活は社会的にも経済的にも極めて不安定な立場にあり、二三度実家に帰つたこともある。このような母の家出は、児童が安定感を得ている対象だけに精神的な外傷となり、それまで以上に母への感情固着を強化した。そして逃げられはしないかと言う不安・恐怖が児童を絶えずおびやかして精神葛藤を導き、度重なる此の経験を通して依存や愛情への神経症的慾求を強め、著しく不安定にしたのである。

就学以後——本児童にとり、就学は著しい臨界状況となり、登校時に於ける精神的な外傷のため、翌日から母と一緒に登校する様になつた。だが学校で側から離れられたり知らないでいる中に帰えられたりする事によつて生ずる危機的経験を重ねるにつれ、登校を前にして破局を予期し、その為に生ずる不安から、附添われても登校を拒む様になつたのである。

ケース(D)

診断 何時も何か動いていて落ち着きなく、先生の話を聞くのに屈んだり砂いじりし、運動会のリレーで味方が負けてきた時突然敵の子供を抱いたこともある。この様に何時も周りを考えず、思いの儘に行動するので目をはなせない。それでいて淋しがりやで一人では何も出来ず、祖母や母からやいやいと言われ世話されなければならない。この様に幼い所があるのに言う事が妙にませて大人びており、明るい性格の様で直ぐひねくれ素直でない。

頭頂(47囀)の他は標準以上の發育を遂げた健康体だが右上肢関節は骨折により、充分正常な屈伸をなし得ない。脳波は軽度異常*で、知能は平均知下であるが、児童のパーソナリティ形成には環境の影響するところが大きい。父子の主従関係は逆である。大人を縮めた様な子供と云う感じを受け格式ばつたところが見受けられるが反面幼児的な行動型式を繰返す。爽快的開放的でありながら、一方否定的態度をとりがちであり、容易に退行的傾向を起す。不適応行動は意識の混濁状態によるのであり、若干の行動異常を伴うと共に、愛情と依存並びに独立と優越への神経症的慾求などが認められる。

環境 別居している老齡父の放任——受胎時父は58歳母は39歳であり、初めての子供なので皆で出生を喜んだ。間もなく父は厳格な家風や児童の祖母や母との微妙な感情問題などから単独で郷里の高校で教職についたため、休暇で帰省した時にだけ児童の遊び相手をつとめるのである。父は児童をととても可愛い様に撫でたり、甘い態度で接しており、以前から児童のなすが儘に取りなしている。両親からはとても睦まじい夫婦と云う印象を受ける。父の別居や主従の逆な父子関係に示される様に父としての役割を果していない事は、重要な環境条件の欠乏を意味し、同時に家庭生活全体を不調和にする素地となつている。

愛情をもつ厳格な祖母の取扱いが恒常性を欠いている事——祖母は士族の家柄で厳格に育つた事を誇りとし、児童や娘である母への礼儀や躰は非常にきびしい。義兄は祖母と廊下で会つた時には一寸よけるだけでは駄目で目礼しなければいけないと仕込まれていた程である。又厳しい反面無茶苦茶に可愛いがり、外出する度に欲しがする物は何んでも買つて来てくれるし、相等めんどろみしてくれる。祖母の取扱いは恒常性を欠いているが、児童は良くなつく面もある。

* 癲癇の疑いで脳波をとつたのである。本児童の様に問題児に癲癇波以外の異常波を有する者の多い事は和田・佐藤(時)、内ヶ崎(27)が報告している通りである。

不安な母の一人子への窒息しそうな保護と 厳格な躾—
—脳炎や骨折による入院生活の他に、毎年風邪・肺炎・
百日咳の何れかに罹ること等は母を心配させた。又児童
は一人子なので、母は不安と焦躁感を持ち続け、絶えず
気を配って世話しながら小言する事も多い。約束して作
った日課も黙つていれば一つとして規則正しく出来ない
ので、不安な母はつい余裕のない言方をするし、児童もま
たかと云う感じを持つ。児童に強い愛情を持ち窒息しそ
うな保護を与えながら、反面親の云いつけを絶対的なも
のと思い、能力に相応しない態度や行動を期待する干渉
がましい厳格さがある。恒常性に欠け矛盾している祖母
や母の養育態度が児童の不安を誘起し、依存と愛情並び
に独立と優越などの神経症的慾求を形成したのである。

周囲の大人から過度に受入れられたこと——生後間も
なく終戦で母系祖母の元に引揚げたが、住居に困った他
の三世帯と二年ばかり屋根を同じくした。その後は祖母
・母・児童の三人家族には大きすぎる家屋なので、三・
四人程下宿させていたし、近隣は全て借家人である。経
済的に有利な事や住宅難も手伝い、周囲の人々の手から
手へと可愛いがられ、大体大人相手に育ち過度に愛情と
承認をほしい儘にした事は、様々な神経症的慾求を助長
させる背景となつている。

就学以後——入学と共に朝食の他は普通の食事量にな
り熟睡する様になつた。1晩に3回起しても屢々夜尿し
たが、現在なお続くとは言え1回起せばすむ様になつた
し風邪もひかなくなり丈夫になつた。これらは入学によ
り閉じ込められた問題の環境だけでなく、普通の社会で
も生活する様になつた点に負うところが少くない。

V 結 果

乳幼時期に於いて体質や知能等の基礎要因と密接に関
聯し合いながら、神経症的児童を形成した環境の構造と
実質について以上四ケースの分析から得られた事を総合
して述べて研究結果としたい。

神経症的児童を形成する生活環境の主要構成要因は家
庭であり、特に家族との人間関係が直接の構成対象とな
つている。家族構成者は(C)が8・9名で家族制度的大
家族であるが、他は、3・4名で近代的小家族形態であ
る。全体として観た家庭の特徴は、(A)温室の雰囲気、
(B)外部との没交渉による孤立状態、(C)家族間のト
ラブルによる家庭緊張、(D)窒息させそうな児童への関
心と父の別居と言ひ得よう。各々異なつた特徴を有する
とは言え、(C)の一部の家族を除けば、何れも児童養育
への高度の関心を持つ点で一致している。直接児童に不
安を生起させた家族は(A)母、(B)父・母・妹、(C)

母・祖母・叔父・叔母・妹など、(D)母・祖母となり、
結局は大部分の家族と言う事が出来るが、全てのケース
に於いて母は決定的な役割(註1)を果たしている。

神経症的児童を形成する乳幼時期環境を考えるに当り
母親・父親(註2)・両親以外の者との三分し、それ等の人々
のパーソナリティや児童との人間関係について述べよ
う。母は(A)(D)1人子である児童の養育上絶えず不
安焦躁の念に駆られ、又(B)(C)著しい不安定さが長子で
ある児童への必要以上の接近接触となつている。母は何
れも充分な適応状態にあるのではなく(註3)、児童に対し
強力な関心と過剰な愛情を有し、母子関係は極端に緊密
なのである。ここで強調されなくてはならない点は、緊密
な母子関係により、母が児童の安定感の拠り所となりな
がら同時に強烈な不安を生起させている事であり、特に
(C)は悪循環関係をなし神経症的慾求を強化しているの
である。例えば左利きの矯正・絶えず母に去られはしな
いかと思う事、厳格な躾などは、愛着を有する母から不安
を生起される図柄要因となつて作用しているのである。

父が児童に直接不安を生起させているのは(B)である
が、叱責する事があるとは言え知性の高い父なので、本
来児童への関心は高いのである。(A)は父を同一視し、
良好な人間関係を形成するに至つたが、(B)(C)は余り
にも緊密な母子関係が継続し健全な父子関係が確立され
ていない。四ケース共緊密な母子関係の枠外に愛情と関
心を持つ父が存在し、一般に児童を承認し許容する養育
態度が認められるが、寧ろ母まかせな傾向が濃厚であり
(D)は放任状態にあるとさえ言い得る。それで神経症的
児童を形成する役割は母親に比し非常に影のうすいもの
となつている。

両親以外の家族について考えると、(C)祖母・叔父・叔
母の拒否には敵意がひそんでいるが、(B)(C)妹の存在
と(D)祖母の厳格さに内在する感情は寧ろ反対のもの
である。家族以外の者との関係では幼児初期に(A)同
一屋敷内の実家の人々、(B)職場の女子事務員、(D)間
借人・下宿人・借家人等から、何れも愛情と承認をもつ
て迎えられている。更に発達するにつれ近隣社会に行動
領域が拡大し、(A)(B)(D)幼稚園や、(C)親戚も神
経症的不安を生起させる環境を構成する様になる。しか
し乍ら両親以外の者との人間関係は、神経症的児童の形
成上一般に助長要因を成しているにすぎないのである。

神経症的児童の形成上重要な役割を果たす人間関係の規
定条件として、次の様な要因(註4)も十分に注目される。
第一に家庭に於ける児童の位置が(A)(D)1人子、(B)
(C)長子である点で、各ケースとも周囲の関心を一身に
集め王子的存在にある。第二は身体面で(A)(B)左利

き、(A)(D) 度重なる罹患、(D) 腕の屈伸異常などであり、特に母の不安・焦躁の念を高めている。第三は社会経済上の問題で(B) 度々の転居、(B)(C) 住居の狭さ、(C) 家計の困難などであり、児童及び家族の生活感情を底深く規定している。

児童を取巻く各々の環境要因は単一で孤立したものでなく、全生育史を通し力動的相互関聯を保ちながら作用しているのであり、此の様な環境構造から成る長期継続の緊張状況の下で神経症的児童が形成されるのである。特に母子関係によつて生じられる経験全体が重要な役割を果たしているものであり、其の点に児童と環境との力動的相互関聯の核心が求められるのである。長期継続の緊張状況の下で神経症的児童は形成されるのであるが、ケース分析の結果最も早期に認める事の出来た特に顕著な基本的不安と神経症的不安は、どの発達段階で如何なる環境条件の下で生じられているのであろうか。基本的不安の場合は、(A)(B) 2歳半頃(C) 1歳7カ月に、不安定な母の盲愛や罹患中に過度の保護がなされて強い愛着が形成されている時に、同じ母から左利きの矯正がなされたり、妹の出生のため関心が一時そこに移つて生じており、食事の拒否や「おとみ負け」等(註5)が生じているのを認め得る。神経症的不安の場合は、大凡3歳半頃から6歳合迄の年齢間に、異常に条件づけられた母の仕草や生活環境が拡大する臨界状況に於いて生じている傾向があり、吃音・肝癪・休校などが認められている。但し(D)は生後1年未滿に経験した哺乳の慾求不満の為、指なめと言う習慣異常が形成されているのが目立つが、不安の生じ上特に浮き出た時期は認められないで、窒息しそうな圧迫から生じた慢性的不安により、同一症状群が常時継続しているのである。

最後に何れのケースも児童の相談として持込まれたのであるが、同時に親の問題に直面している。そこでは養育の規範・訓練の技術よりも、両親や家族の適応状態や児童への感情や態度に決定的な病因(註6)が在る。又児童の不適応行動に示された現象型は母や家族のそれと異なつていても、其の発生条件はそれ等に密接に関聯しており家族構成者のパーソナリティや日常生活を反映した結果として考えられるのである。そして家族構成者自身の生活歴や家庭の成立に関係すると共に、広くは文化社会的背景を持つていたのである。例えば、親自身の生育中の両親や同胞との感情関係、伝統的家族制度に制約されている恋愛結婚や嫁と姑の特殊な間柄、並びに土族家庭の厳格な家風、近隣社会との生活水準や様式の甚だしい差異、終戦後の住宅難などをみる事が出来たのである。尙それ等の中で形態は近代的小家族でも、家族構成者の生

活が家の意識や家族制度的緊張により、根強く左右されているのが特徴となつていとも言える。

註1) 乳幼時期のパーソナリティ形成上、両親特に母は複雑な条件の下に於いてさへ極めて重要な役割を果たす事は一般に認めるところである。例えば引用文献中から拾つても、Horney(9, p 82), Louttit(16, p 35・46), Slavson(20, p 72)等が記している。尙先きに(本論文, 35)神経症的児童の形成上家庭に生活環境を有する乳幼時期の児童にとつては、家族構成者との人間関係が主となる事を述べたが、ここでも更に実証できたわけである。

2) Ackerman(1, p 139)は不健康な夫婦関係が彼ら自身にだけでなく、家族生活の不統合の中核として又子孫の不適應の前ぶれとして意義のある事を強調している。本論の場合は、(D)父の別居生活が注目されるに止まり、両親の人間関係よりも寧ろ他に重点があるので、特別にそれを取上げなかつた。神経症的児童を形成する病因は両親の個人対個人の人間関係よりも、母子関係に決定的な問題があると考えられたのである。

3) 此の点からHamilton(8, p 92)が、「神経症的な親は多くの場合神経症的な児童を生ずる様に思われる」と記しているのは正しい。

4) 不健全な人間関係を規定する条件としては、周囲の大人の不適応を根底としながら、本論の分析対象となつた児童の場合には、家庭に於ける児童の位置、身体条件・社会経済上の問題も見逃す事の出来ない作用を及ぼしているのである。この様な人間関係の規定条件が作用する点からも、Hamilton(8, p 75)が「不安な児童は何時も或る程度の変を経験しているが、決して充分であり良好で首尾一貫したものでなく、厳格な或は義務的な或は間歇的なものである」と述べている言葉の内容が理解される。

5) おとみ負けとは弟妹の出生によつて生じた幼児の退行現象を意味している地方語である。

6) Silverman(19, p 18)の研究では、彼が対象とした児童の問題的行動が両親の犯罪事実そのものよりも、家族構成者間の微妙な情動的關係に非常に多くかわり生ずると言う結論に達している。Eliot(22, II)も、児童の行動の諸研究は両親のパーソナリティや態度又は児童への感情が、養育の規範よりも、児童の健全な成長に遙かに大きな影響をもつ事を明らかにしたと述べている。

VI 考 察

神経症的児童の形成上決定的な役割を果たす親子関係に就いてホルネイの所論*を述べ、それと比較的対照しながら、本論の対象となつた四ケースの分析結果を考察してみよう。初めにホルネイが親子関係について述べてい

* Horneyの親子関係についての所論は四文献(9~12)を基にしているが、特にoedipus complexについて批判している章(9, 79~87)を参考にした。

る所を要約して記そう。

両親の一方に強い愛着を生ずる条件には二つの系列があり、それらは別々の事も共存している事もある。一は児童に露わな性的接近の仕方をとる場合であり、他は性的要素を本質的なものとせず児童の不安と関係がある。

児童を不安に導く典型的な構造は、両親への依存と敵対衝動との間に起る葛藤である。この不安を消す一つの方法は、若し安心できる様な愛護を得られるならば、両親の一方にすがることである。結果として現れる状態は、片親に対する熱情的な執着と他の親又は独占を邪魔する者への嫉妬であり、フロイドがエディプス複合体として描いたものと酷似したものになる。ホルネイの経験では成人の神経症を分析すると出てくる幼児期の親に感ずる執着の大部分はこの種類に属するものである。

なお近親相姦に似た愛着の方は目標が愛であり、愛情や性慾を刺戟する方の親に向けられる。不安を条件とした愛着の方は目標が安全感であり、力の豊かな畏怖を感じさせる方の親に向けられるのである。

このようなホルネイの所論と比較対照しながら、本論の分析結果に示された親子関係について一層の考察を試みたい。片親や祖母など特定の人に愛着を生ずる傾向は認められるが、判然と一方にのみ偏したものではない。愛着の発生条件の一つとして母の性的な色彩をおびた接近が考えられ、其の程度は露なものでない*が、相等大きな影響を及ぼしている。他は不安と関係づけられるのだが、必ずしも愛着を生ずる決定的な原因とはなっていない。且つ愛着を有する当の母や祖母から不安が生起される場合と、父・叔父・叔母・妹から拒否されたり母を独占する事を妨害されて不安が生起される場合と考えられる。更に同じく愛着を有する母から不安が生起される場合でも、左利きの矯正によるのと絶えず母に逃げられはしないかとおびえているのでは、愛着の対象や強度を形成する条件は極めて相違している。これ等二つの系列はそれぞれユニークな関聯を保ちながら全てのケースで共に作用しており、途も角第一に緊密な母子関係を形成し、母への依存性や愛着を培っているのである。

児童に不安を生起させる決定的な原因は、愛着の対象者である母との人間関係に求められる。両親共不安を生起させている場合もあるが、夫婦としての関係と言うよりも寧ろ個人としてである。母以外の家族から拒否され不安を生起した場合は、愛着を有し安全感を与えてくれる母に接近している。しかし児童を不安に導く典型的な構造は、児童が愛着を有する母との人間関係に於いて、様々な事情から生起している早期の精神葛藤に在る。この母から生起された不安を消す一つの方法は、若し父か

ら愛情と保護を得ているならば、より多く父へと接近させる場合が多い様である。要するに結果として現れる状態は、母への熱情的な執着と、安全感を得ている母との緊密な関係を邪魔する者への嫉妬や其の排除であり、他に母や祖母への強い愛着と憎悪の排反感情であつたり、又児童を愛護する父へより多く接近させているのも認められた理である。それはフロイドがエディプス複合体として描いたものと酷似している場合が多いのであるが、児童の発達段階や児童を中心とした家庭緊張の力動的構造に依り、種々な形態をとるのである。従つて神経症的葛藤の早期の発現様式或は生起上の力動的構造は、ホルネイが成人の神経症を幼児期にさかのぼつて得た多くの場合とは異なっている様に思われる。

なお近親相姦に似た愛着の方は目標が愛であり、一般に過度の愛情と保護を与えてくれる母に向けられるが、愛着を有する母から不安が生起される様になり、父から愛護を得ている場合には、発達の経過につれてより多く父に接近して行くのを認める事が出来た。不安を条件とした愛着の方は目標は安全感と考えられるが、両親が夫婦として同時に児童に不安を生起させているのでないから両親のうちの力の豊かな畏怖を感じさせる方に向けられる必要はなく、児童を愛護し安全感を損わないか安全感の抛り所となる方に向けられるのである。これも児童を取巻き、愛護し不安を生起させる家族群座の特殊な力動的構造に依存して、種々の形態を有するのである。

以上のような結果の相違にはホルネイと筆者の方法や対象上のへだたりも考えられるが、更にわが国と欧米諸国のそれぞれの文化社会に規定されている家庭構造及び児童を中心とした人間関係の差異**に依る所も大きいと考えられる。

本論で取上げられた四ケースは全て教育相談中の著しく神経症的な児童であり、我国の中都市に居住する中流階級に属しているので、当然その特殊性を荷なっており分析結果も其の範囲を超えないと言う限界を有する。それで都市だけでなく農漁村の各階層並びに相談分類の全てに亘り広範囲にケース発見を行えば、神経症的児童を形成する病因も一層浮きぼりにされ妥当なる法則化や類

**わが国と欧米とは家屋構造や個人と家との関係が著しく相異している。特に人間関係の点では、欧米は近代的小家族で家族の初めは夫婦であるが、我国は近代的小家族形態である場合も家族制度的意識が濃厚で従の間柄に重点がおかれている。ここでは欧米と異り家族制度的緊張に支配されている緊密な親子関係に児童を取巻く人間関係の核心があり、神経症的児童を形成する病因の源泉を認め得るのである。

* わが国の中流階級は武士道の流れをくみ、性道德の保守性が強いので、性的な接近をするには余りにも閉鎖性が著しい様に思われる。

型化も可能と考えられる。更に女子児童が1名も含まれなかつたのは、如何なる理由に基くものなのだろうか。又分析結果やその考察に示された様に、わが国に特有な家庭構造の欠陥や人間関係の障害に病因を有する事も考慮されたので、当然ケースワークも心理療法も再検討され、新たな視点に立たなければならぬ所も 少ないと思われる。

児童と母や家族の不適応行動像は異なつていても、発生条件は極めて密接な関聯を有する事が明かにされたので、最後に次の様に述べておく。児童に望ましい適応を成さしめる為に欠く事の出来ない健全で創造的な親子関係を確立する為には、先ず第一に両親が安定感と充足感に満ち、幸福で能率性の高い生活を営む事が必要である。

本論は未熟なものでありますが、大脇教授の再度のおすすしめにより、全く稿を新にして公けにしたものであります。先生からサポートされました事に感謝の意を表します。また児童相談所長小川芳雄博士の御指導を感謝します。

文 献

- 1) Ackerman, N.W. : The diagnosis of neurotic marital interaction, *Social casework*, Vol. XXXV, 1954, 139~147.
- 2) Basel, H.M. : Seelische Hygiene als akademisches Unterrichtsfach, *Praxis der seelischen Hygiene* (von Basel, H.M., und anders), 1943, 177~206.
- 3) Challman, R.C. : The adjustment of the individual, *Educational Psychology*, 1948, 614~646.
- 4) Dollard, J., and Miller, N.E. : *Personality and Psychotherapy*, 1950.
- 5) Dorcus, R.M. : The psychoses and the psychoneuroses, *An introduction to clinical psychology* (ed. by Pennington, L.A., and Berg, I. A.), 1948, 265~322.
- 6) Dunlap, K. : *Personal adjustment*, 1946.
- 7) Fenton, N. : *Mental hygiene in school practice*, 1947.
- 8) Hamilton, G. : *Psychotherapy in child guidance*, 1948.
- 9) Horney, K. : *New ways in psychoanalysis*, 1939.
- 10) Horney, K. : *Self analysis*, 1942.
- 11) Horney, K. : *Our inner conflicts—A constructive theory of neurosis—*, 1945.
- 12) Horney, K. : *Neurosis and human growth*, 1950.
- 13) Kanner, L. : *Behavior disorders in childhood, Personality and the behavior disorders* (ed. by Hunt, J. McV.), Vol. II, 1944, 761~793.
- 14) Lausanne, F.W. : *Zur Psychohygiene sozial schwieriger Kinder und Jugendlicher, Praxis der seelischen Hygiene* (von Basel, H.M., und anders), 1943, 39~92.
- 15) Lewin, K. (Translated by Adams, D.K., and Zener, K.E.) : *A Dynamic theory of personality*, 1935.
- 16) Louttit, C.M. : *Clinical psychology*, 1947.
- 17) Malamud, W. : *The psychoneuroses, Personality and the behavior disorders* (ed. by Hdnt, J. McV.), vol. II, 1944, 833~860.
- 18) Prescott, A. : *Emotion and the educative process*, 1938.
- 19) Silverman, B. : *The behavior of children from broken homes*, *Amer. J. Orthopsychiat.*, vol. V, 1935, 11~18.
- 20) Slavson, S.R. : *Child psychotherapy*, 1952.
- 21) Thorpe, L.P. : *Child psychology and development*, 1946.
- 22) U S. Department of Health, Education, and Welfare, Social Security Administration, Children's Bureau : *Your child from one to six*, 1945.
- 23) キュービー L.S. (土居訳) : *精神分析への手引—理論と実際—* 昭和27年.
- 24) 隠岐・江草 : *小児神経症に関する臨床心理学的研究*, 日本応用と関西の連合心理学大会発表 (応用心理学論文集 137頁), 昭和27年.
- 25) 佐藤棟男 : *社会不適応児の形成—特に乳幼児期に於けるその心理環境要因のケース分析—* 宮城県児童相談所紀要 第二輯, 1954, 31~40.
- 26) 宇津木えつ子 : *児童判定の状況及び課題*, 宮城県児童相談所紀要 第二輯, 1954, 6~12.
- 27) 和田・佐藤(時)・内ヶ崎 : *行為問題児の脳波*, 東北心理学研究 創刊号, 1951, 25.

— 1955.2.5. 受稿 —